

日本山岳会 越後支部報

第 17 号

平成28年10月16日
発行 日本山岳会越後支部
発行者 遠藤家之進正和
新潟県新潟市南区鷺ノ木新田1049
TEL・FAX 025-362-5004
広報委員長 本間 一人



私の一枚

親子登山「小さな一歩」

日本山岳会が深くかかわって制定された「山の日」が、本年度からスタートした。

「山の日」8月11日、越後支部の新たな取り組みとして、妙高・笹ヶ峰「夢見平」で親子登山を開催した。

参加者は少なかったが、未来に向けて「小さな一歩」を歩み始めた。

撮影場所
妙高市笹ヶ峰「夢見平」登山口
後藤 正弘

『ある日の出来事』

本間 一人

九月二十六日、日本山岳会の会報「山岳」が届いた。最初に特別寄稿として「徳仁親王殿下」の「歴史と信仰の山を訪ねて」が二十九ページにわたり紹介されていて、山がお好きな殿下が五歳のときから登られた軽井沢の離山から始まり、北は利尻山、南は開門岳まで、登った山々は百七十余りとか、そして思い出の山々が克明に語られています。

さて、私にとって殿下との出会いには思い出深いものがあります。それは横越町議会に席があった際のこと、平成十五(二〇〇三)年秋、来町なされ町役場で昼食をおとりになられました。町をあげての大歓迎でお迎えのさい侍従の方より本間議員は前列の最後に出るように、殿下のお礼の言葉がありますとのことで、緊張の中お出迎えました。

実はこのことについては、私の著書「阿賀源流の山々」を出版のさい、橋本正巳氏から、山が好きな皇太子殿下なので、贈られたらとの話があり、事前に故小倉 厚氏を通じて東宮御所に連絡をとったほうがいいと聞かされ、小倉氏に紹介文をお願いした経緯がありました。

ご来町当日は侍従長が「阿賀源流の山々」

藤島蔵書整理作業その後

高辻 謙輔

の本を鞆の中に忍ばせ、この本をいただいたお礼のお言葉が殿下からございます、と云うことで緊張の中、お言葉があり、雅子妃殿下からも有難うの言葉があり、私はもちろん、取り巻きの同僚からもびっくり声しきり、十三年前の秋の出来事でした。

故小倉 厚氏(橋本氏とも同行)とはカムチャツカのトルバチック峰や中国ガンシカ峰などにも遠征、懐かしいひとこまを思い出させていただいた会報「山岳」でした。

.....

藤島玄元越後支部長の遺族から関川村に寄贈された約六千冊に及ぶ図書と資料類は、二〇一四年にそれまで仮置されていた関川村公民館内の図書館から関川村小見一四〇の「川北ふれあい自然の家」(旧川北小学校校舎)に移転し、図書委員会としても図書や資料類の整理・分類作業にかかわってきました。

作業は六月から年末にかけて行われましたが、その状況は越後支部報第十二号(二〇一五年二月)で中間報告したところ。整理作業はその後も引き続き行われ、図書室としての体制がひととおり整ったところで二〇一五年六月二十五日、川北ふれ

あい自然の家を会場に「藤島蔵書整理完了報告会・シンポジウム」が関川村教育委員会の主催で開催されました。

当日は式典の後、図書室も一般公開されましたが、シンポジウムの開催にあたっては次の方々の基調講演がありました。

「蔵書の整理と分類」佐久間雅義氏

「藤島玄山岳研究年譜」遠藤家之進正和氏

「飯豊連峰大地図にかけた夢」谷中隆明氏

「藤島ノートを読む」田邊信行氏

この「藤島蔵書整理完了報告会・シンポジウム」の様子は「新潟県山岳協会ニュース」第三二〇号（二〇一五年九月）にくわしく報告されています。

約六千冊の図書は、五十嵐篤雄元越後支部長の蔵書約千冊と共に整然と書架に整理され、山岳図書資料館としての体制が整いました。

ただ、蔵書の整理は完了しましたが、書簡、葉書、写真など多くの文書、資料が残されており、これらの整理は引き続き登録会員によるボランティア活動で越後支部の佐久間雅義氏指揮のもと、毎月一回行ってきました。

二〇一六年八月十一日に「山の日」文化事業として関川村山の会主催による「藤島蔵書（山岳・登山資料）の一般公開」が行われ、小田幸男氏による「南極観測生活の思い出」、谷中隆明氏による「藤島玄編・

飯豊連峰大地図の変遷」の講演と合わせて図書室が公開され、多くの参加者で賑わいました。

現在、ボランティアで蔵書と台帳の照合作業を続けているところです。蔵書の閲覧は、登録会員（年会費千円）とその同行者など、一定の制約がありますが、毎月一回整理作業を行っていますので、興味のある方は顔を出してみてください。

問い合わせは事務局
「せきかわ歴史とみちの館」
(電話〇二五四一六四一一二八八)



村上市小揚から山形県小国町荒沢(通称塩の道) さいのかみとうげ おおとうげ ひのとうげ 才ノ神峠・大峠・樋ノ峠

遠山 實

国道七号線、猿沢(柏尾)猿沢)川端、岩沢、下新保、大場沢、笹平、釜杭、小揚まで県道猿沢、小揚線から三つの峠を越える「塩の道」である。西山新道として長井商人が経費を負担した道である。

柳生戸集落は、昭和四十年十月車道開通、電灯も灯ったが、昭和五十六年十一月戸数七軒、人口二十三人約四〇〇年の幕を閉じ、古渡路に集団移転した。

小揚から狭い蛇行する車道を小揚川に沿って遡上し、戸館橋先から上り詰める才ノ神峠の小さな祠がある。小揚川流域は急峻な山で、良質のケヤキが産出された地域である。

才ノ神峠は、眼下に長津川が流れる。才ノ神峠を下った所から大栗田までの山道もあつたが今はない。この付近から道路沿いには畑が点在し柳生戸集落跡に近い。

柳生戸は、慶長二年(一五九七)瀬波郡絵図に、上杉景勝時代に検地結果が作成され、柳生戸と記され大國但馬と鮎川の入逢(いりあい)で地味は下の土地であった。※大國但馬守実頼は直江兼統の弟

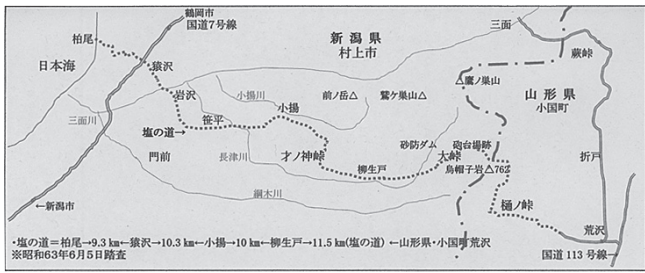
小国や米沢方面に抜ける中継地として要所にあつた柳生戸は、屋号「番所」や「牛

馬為安通」の碑、弘法の投げ桜(才ノ神峠山桜)、「うぐいすの尻」、「猫また」、「海の馬」などの民話があつた。

急峻な渓谷にあるこの地は、農作物は自給自足で山仕事、狩猟に頼る生活であつた。集落跡地先の橋を渡り切った所に「牛馬為安通」の碑がある。砂防ダムの手前から伐採作業道を登って行くと、五一三メートルの尾根に出る。ここからは坦々とした道となる。右の綱木川流域は、終戦後製炭需要期に大栗田集落へ、他村の人が入り黒炭の炭焼きをしていた時期もあつた。

尾根道は約九尺(二・七メートル)の道幅があり要所に、直径二メートルの牛馬に飲ませるため池跡と思われる地形が見られる。また、戊辰の役の名残で「砲台跡」という地名も残っている。県境の烏帽子岩(七六二メートル)付近は道跡が分かりにくい。県境主稜の北には、ヨモギウド池がありミズバシヨウが群生する。県境から北俣沢上流は踏み跡がわかりにくい。樋ノ沢川まで登ると道は整備されている。樋ノ沢川を下り砂防ダムからは車道となり荒沢集落である。

この道は、新しい脇道北方新道として、村上、米沢藩煎りで開発された。後の越後街道(国道一一三号)以前には小国、米沢への交易道として利用され、村上から鮎海産物等。米沢からは生糸、煙草、配荷な



どが運ばれ、宮大工も小国の神社仏閣をつくったと言われている。ブナの原生林の尾根道は、周囲の山々の地形から物流往來に適した道で、先人の生活感に感銘する道である。

近くには、小国町折戸集落から三面への蔵峠（わらび）がある。

※小揚、柳生戸間の道路状況は、村上市役所朝日支所

ズボラな登山人生

目崎 貞良

初めて登山を経験したのは高校二年の夏、山好きな先生から連れて行って頂いた苗場山遊仙閣泊りの一泊二日の山行でした。当時登山道具など無く、農作業用の地下足袋、ゴムの雨合羽、親が使い古したりユックサク。

一日目は土砂降りの雨の中、三俣からドロコンコになっての登りでした。翌日は一転朝から快晴。小屋の外に出た時の目の前に広がる数えきれない池塘を配した大湿原。あの感動が六十年近く山に取りつかれる第一歩でした。

卒業後、地元の日岳会に入会し、岩登り・沢登り・雪山へと給料のほとんどを山で使っていた数年間。二十七歳の時、勤務先の会社が倒産し人生が一変してしまう。

翌年、建築関係の超零細企業を譲り受け、建築ブームと重なり忙しさで十年間山とお別れ。ようやく山登りを再開するも仕事の関係、家族への責任も重くなり、岩登り・沢登りは自粛。雪山以外はトレイル歩き。山岳会も解散し、ほとんど単独行。そのうち段々と仲間も出来、グループ登山と半々位となる。

日本山岳会への入会は晩年で五十五歳の時でした。井の中の蛙だった自分にとって、先輩から聞かせて頂く話に恥入るばかり。入会後間もなく室賀氏から自然公園指導員の指名を受け、糸魚川の石田氏と三人で長野、石川、富山、群馬等の研修会に御一緒し、室賀氏の人脈の多さに驚いたり感心したりしたものでした。何も分からない自分にはビニール袋をぶら下げてのゴミ拾いや、登山道に出来た水溜りの排水、春先の登山道に落ちた木の枝の片付け位のものでしたが、何時の間にか同行者もゴミ拾いに協力してくれたり、ヘビースモーカーの仲間が携帯用の吸い殻入れを持参するようになったりと有難く思ったものでした。

そのころから室賀氏と山崎幸和氏から「昔、小千谷にも山岳会があったんだから復活するように」と再三催促されておりましたが、延び延びになっておりました。

平成十二年の高輪プリンスホテルでの年次晩餐会の会場で旧知の松井氏（小千谷ハイキングクラブ会長）とテーブル席が隣となり、小千谷では山の話などした事も無かったし、同じ会員同士など夢にも思わなかったけれど、帰りの電車の中で室賀氏・山崎氏から会発足の話が再燃。帰ってから何回か飲みながらの打合せ、グループの仲

間からも協力して貰い、翌年四月「小千谷ハイキングクラブ」を発足。最高齢者だった自分が会長を十年、その後松井氏にバトンタッチ。今年度県山協にも加盟させて頂き、六十名程の全員で『無事故』を最優先とし、年八回の会山行と会員同志誘い合っ

て、グループ登山を楽しんでいます。

七十歳位迄は年間八十日前後山に入っておりましたが、年々体力の衰えは進むばかり。一昨年の十月、頭に動脈瘤が見つかりカテーテル手術を受ける事になり八日間の予定で入院。ところが三十年程前に春山でクマに出会った時にうっかり雪庇を踏み抜いて八メートル程落下したことがあり、それが原因で脊髄に支障があったらしく左半身に痺れが生じ三週間は車椅子生活。退院迄七十五日も経った始末。一年後の冬の寒さでまた痺れがひどくなり、治るのかどうかも分からない毎日です。

十年間の空白を除いて実質五十年近くの登山人生で、予定表は何百枚も書いたけれども、ズボラな自分には帰ってからそれを書き残す事が面倒臭く、他人に誇れるような山行もなく、深田さんの百名山や、標高ベスト百等は終わってはいませんが、楽しかった山、思い出に残っている山は三つ程あります。

一つ目は、四月上旬の越後駒ヶ岳。大湯から登り八時間、下り五時間、一年間で一番きつい行程であり体力を試す山行でもありました。

二つ目は、二月中旬の赤岳、阿弥陀岳。単独でもほとんどラッセルの心配もなく、美濃戸口までマイカーで入山出来、駒ヶ岳の春山と共に二十数年間続いた楽しかった年間行事でした。

三つ目は、若い頃から四季を通じて楽しめた谷川岳。スキーブームの頃は天神平へのロープウェイに乗るのに一時間。待つのが嫌で七時間掛けて巖剛新道を登った事も数回。夜行日帰りでアプローチが楽で多い時は年間十回位。二百回位は登った一番好きな山でした。

身体障害者となってしまう昨年は、幼稚園の子供達でも登れるような軽登山が五回。今年は二十回位を目標に、一回でも多く一日でも永く山で楽しみたいと思う今日この頃です。



日本山岳会越後支部創立七〇周年事業
日本三〇〇名山「越後支部担当二十一座踏破」いよいよ最終盤!!

これまでに十八座を登頂して、いよいよ最終盤を迎えます。残すは青海黒姫山、そして御神楽岳です。

まだ参加していない会員の皆さん、最後のチャンスです。是非ご検討下さい。

新入会員の勧誘にご協力願います。

越後支部では、新入会員勧誘の強化に取り組んでおります。会員増加に支部会員の皆様のご協力をお願いします。

支部事務局へ問い合わせいただければ「パンフレット」及び「入会申込書」を送付します。是非、お声かけ下さい。なお、「入会申込書」は日本山岳会ホームページからもプリントできます。

越後支部創立七〇周年記念祝賀会（越後支部晩餐会）を開催します。

本年度の越後支部晩餐会は、越後支部創立七〇周年記念祝賀会として開催します。

記念事業の日本三〇〇名山「越後支部担当二十一座踏破」報告会を中心に楽しい集いを企画中です。多くの会員の参加をお待ちしています。

詳細は後日ご案内いたします。

●開催日 二〇一六年十二月十日(土)

午後一時より

●会場 新潟市 新潟東映ホテル
●会費 九千円

支部会員動向

(二〇一五年十二月二十五日～二〇一六年八月末)

一 物故会員

飯田 武夫(八二五七) 新潟市 死亡日不明

二 支部会員総数(二〇一六年九月十四日現在)

二〇〇名



編集後記

今号は原稿が思うように集まらず遅れたことをまず、反省するとともにお詫び申し上げます。

このような事を避けるため、記事の投稿を再度会員にお願い申し上げます。

私の一枚(写真と一〇〇文字)、峠シリーズ八〇〇字、山行記録、紀行文、随想、などは是非お願いします。

八月二十八日夜、私の所属する会員から

電話が入った。友人が行方不明になっているから二十九日五時に自宅を出て大石ダムまで来てくれとの依頼であった。

ダムではすでに捜索隊が西俣コースに向け出発したとのことで、私は待機することとした。

この遭難がどうして発生したのか聞くと、登山者でなく、植物研究同行会で私の友人が所属していて、このコースを推薦したらしい。責任を感じ一刻も早い救出を願い、どのような対処が必要か求めてきたもので、すでに村上署が動いているのでその指揮下に入ることにした。

二十七日、二十八日の二日間の行動を同行者に聞くとところによると、暑さで目的地の大熊小屋までは行き着けずバーク、引き返すときにはぐれ、探したが行方不明となったとのこと。かなり疲労していたらしく、パニック状態になったようである。

寒さで低体温症になった場合も、暑さでも体温の異常で血圧の変化がおき、脳の働きが悪くなり、正常な判断が出来なくなることもあると聞いたことがある。とにかく登山道にいてくれることを願った。

どのような理由があろうと、同行者とともに行動しなかったことが第一の原因としか言いようがない。

広報委員長 本間 一人